

第十六回 玄和全国競書大会優秀作品



近藤 嵐光

審査所感

第十六回玄和全国競書大会の審査は恒例の十一月二十三日に玄和文化院に於いて行われました。

早朝より準備をしてくださった係り・お手伝いの皆様のおかげで定刻の十時に開会が出来ました。今回は、一般部半紙271点・条幅部762点・学生部は1913点でした。多くの作品を出品してくださった関係指導者のご協力に深く感謝いたします。理事長、常務理事五名、常任理事三名の審査員九名が各部に分かれて審査にあたり公正で慎重かつ丁寧を心がけていただき何回も何回も眼を通していただきました。

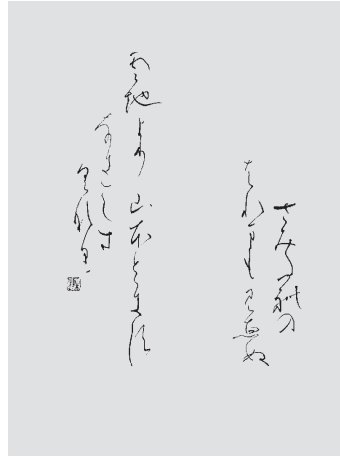
審査をされていて気になったのは、押印のされていない作品が結構多く見られたことです。そうすると落款の入れ方に気配りの無い作品が目につくようになり非常に残念に思いました。そもそも落款とは、落成款識を略した言葉として書画の一端に筆者の姓名や字号を著して印を押捺するなどして作品の完成の意を表すことです。その作品に対して責任を持つことだと思うと印無き物やあまり考えずに号を書き印を押すのではせっかくの作品を台無しにしてしまうのではないのでしょうか？作品製作で最も大切にすべきところと考えいつの作品もおそろそかにしない心構えを持っていたきたいと思います。

今回の大会も玄和風行草や隸書体の作品だけでなく、かなや篆書体の作品を出品され

— 玄和書道会賞 —



野井 翰娜(高三)



田中 梨風



田代 初夏(小三)



宮川ひより(小六)



前島 美帆(中二)

ているところまで競書大会に懸ける意気込みを感じ審査にも熱が入りました。  
 さて、係り、お手伝いの皆様の手の良さもあってスムーズに審査も進み最終審査は挙手によるのですが審査席もくじ引きで決め、他の審査員の影響を受けぬよう点数カードを挙げるという公平な審査を行いました。さすがに厳選された最終審査に残った一般部条幅の作品はどれもすばらしく審査員をうならせるものばかりでした。今でこそ指導者がそれぞれに個性の表現として作風が様々な顔を持ち始めたのですが、その根底にある春浦調のリズム感やテクニク、造形美そして惜いデフォルメと受け継がれ磨かれてきたものがそこにあると感じました。また幼児や小学生の半紙一杯に堂々と大きく伸びやかな字を書くのをみて字の育つように書道が人格形成に役立つような良い心から思いました。中学生や高校生においては一般の作品以上に素晴らしいテクニクやセンスのある作品も多く見られ今後の成長に期待を持ちたいと思いました。  
 私の思う良さ作品とは、気が満ちて最初から最後まで妥協を許さない作品ではないかと思えます。私もそんな作品を書きたいと思えます。今後またこの大会で皆さんの思う良さ作品を出品されますことをお願い申し上げます。

第十六回 玄和全国競書大会  
 審査委員長 雨宮 春聲

— 春 浦 賞 —



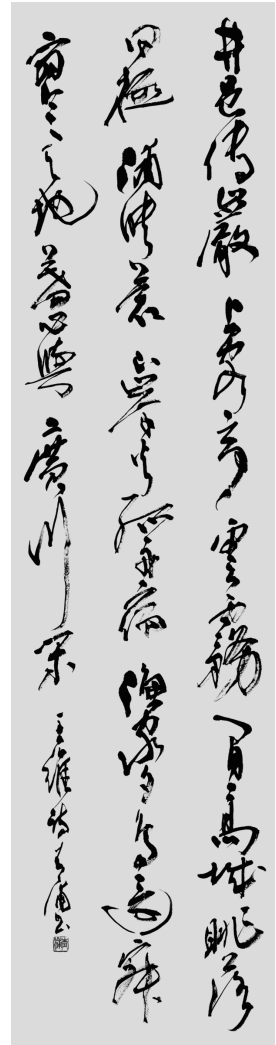
藤井航之郎



ケレハー加央里(高二)



市川 清子



桜井 青浦



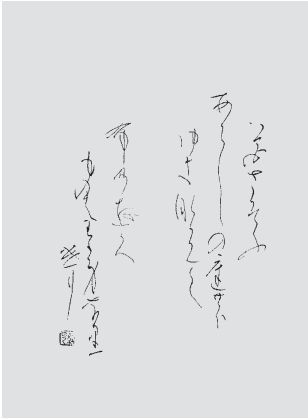
矢島瑠之介(小二)



宮川いろは(小四)



政井 結衣(中三)



三林 紅雲



山口 響(高一)



明石 雅佳



白戸 香風



野口美優里(小一)



川上 貴弘(小五)



金田莉里花(中一)